

## 4月3日から研修に入りました。

4月から民間稲作研究所の研修生としてお世話になっております、浦田優と申します。

東京でインターネット関連のシステムエンジニアとして働いておりましたが、稲葉理事長の「完全に無農薬、化学肥料も一切使用せず、雑草を抑えて美味しいお米をつくる」という稲作の手法に感銘を受け、農業を生業とすることを決意いたしました。

まったくの別業種からの転身ですが、農業は昔から気になっていました。私にも子どもの頃に稲作の手伝いをした経験があります。田植えや稲刈りなど楽しいこともありましたが、私にとっては農薬への嫌悪感が、農業への悪いイメージにつながっていました。

さまざまな機会に散布される殺虫剤、消毒剤、除草剤の嫌な臭いと、農薬を散布する大人たちの「こっちに近づくな！」という逼迫した声に、そこはかたない恐怖を感じ



ポイント研修生のみなさんと  
苗代の枠をつくり、記念写真

たのを覚えています。一般的に「農業」という言葉からイメージされる、「健康的」「自然との共存」「牧歌的」といった印象を打ち崩す殺伐とした雰囲気、子どもながら違和感を感じていたのだと思います。

歳を経て社会に出てからも、ニュースなどで目にするたびに、農業に対する不信感は募る一方でした。農薬を半分に減らしたからといって、新開発の“半分の使用量でも効果は抜群”な農薬を使っていたら意味があるのでしょうか。“ヒトをはじめ哺乳類には全く無害”な農薬は、子どものときから何十年も摂取し続けても本当に無害と言えるのでしょうか。利益のために殺す必要のない生き物を殺し続けて、“田園”という文化を破壊することは、教養のある大人の生き方と言えるのでしょうか。

また数年前には、とある農園で「有機稲作体験」として参加者を集めるイベントにも参加した経験があります。それは夏の間中、参加者に草取りを強いる過酷なものでした。

民間稲作研究所の技術は、「農薬を使わない」「雑草を抑える」という一見相反する課題を、力づくではなく、自然の仕組みをうまく利用することで実現しています。しかも、宣伝過多な有機農業で耳にするような、「心意気」とか「長年の勘」ではなく、きちんとした研究と観察と論理の積み重ねによって考えだされた技術であると、日々感銘を受けています。

安全への不安や、環境破壊への後ろめたさを感じることなく、心から「おいしい」と思える農産物をつくり、その喜びを皆様と共有できるよう、これから精進する所存です。なにとぞよろしくお願い致します。



## 24年産のお米の事前予約受付中です。

電話・ファックス0285-53-7093まで